

る地方の書き手たちがいた。

## 2

前回述べたように、出発世代、すなわち一九六〇年前後の現代児童文学の出版を担ったのは、概ね二十代後半から三十代前半の若い書き手たちだった。例えば、佐藤さとるは一九二八（昭和3）年生まれで、『誰も知らない小さな国』が出版された五九年は三十一歳、『木かげの家の小人たち』のいぬいとみこは二四（大正13）年生まれで三十五歳（いずれも誕生日を越した時点での換算）だった。以下、六〇年にデビューした山中恒は三一（昭和6）年、今江祥智は三二（昭和7）年生まれ、松谷みよ子が大正から昭和に切り替わる二六年生まれである。翌六一（昭和16）年デビュー組では、寺村輝夫が二八（昭和3）年、古田足日が二七（昭和2）年、神沢利子が二四（大正13）年というように、男性はすべて昭和一ケタ生まれだからこの時点で三十歳前後、女性は大正末期の生まれで三十代半ばということになる。ここで思い出したいのは、日本の敗戦が昭和二十年だったという事実である。これが何を意味するかというと、昭和生まれの男性は、基本的に徴兵検査を受ける前に戦争が終わったということ、逆にいえば大正生まれの男性は徴兵検査を受け、ほとんどが従軍経験を持つということである。「基本的に」と書いたのは、戦争末期の昭和十八年、徴兵

検査が二十歳から十九歳に繰り上がったからで、前記男性作家で一番年上の、昭和二年十一月生まれの古田足日は、戦争があと一年続いていれば徴兵検査を受けていたはずである。即ち、日本の現代児童文学の出版を担った書き手たちは、戦時下の軍国主義教育を浴びるようになって育った世代であるが、基本的に従軍経験は持たない、言わば「銃後の世代」の書き手たちだったということである。（ここで基本的に書いたのは、十七歳から軍隊に志願することができたからで、實際寺村輝夫は、東京府立第一商三年修了時に予科練に志願し、特攻隊員として終戦を迎えている。また、女性の書き手たちの場合は同年齢の男たちは入隊したわけだが、女性であるが故に、これも基本的には「銃後」といえる。）

以上のことが、児童文学の世界では、世代的逆転現象ともいべき事態を生みだした。本来なら、昭和一ケタ世代に先んじて児童文学作家としてデビューすべき大正後期から末期生まれの世代の（男性の）書き手たちが、一つ下の世代の言わば後塵を拝することになったのである。名前をあげれば、前川康男、今西祐行、竹崎夕斐、長崎源之助、大石真といった作家たちである。一番上の前川が一九二一（大正10）年、一番下の大石が二五（大正14）年生まれである。例えばこの中で、二三（大正12）年生まれの今西の経歴を『現代日本児童文学作家案内』（すばる書房、一九